

平成 29 年度 第 2 回 ゼニガタアザラシ科学委員会  
議事概要

**議事 1. 春期の防除対策等の結果について**

○事務局より、資料 1-1 および資料 1-2 に基づいて、春期の防除対策結果および個体群管理結果について、水中カメラの映像を交えて説明。

○主な意見等

**【春の捕獲・混獲結果の評価について】**

・これまでの結果では捕獲頭数に幼獣への偏りがあると思われ、そのインパクトについてご意見をいただきたい。シミュレーション上、幼獣は何頭捕獲を想定しているのか。

→個体群シミュレーションでは、捕獲個体はランダム、混獲個体は幼獣に偏ると想定している。シミュレーション上、今年度の幼獣（0歳と1歳）は捕獲と混獲合わせて104頭を想定している。このまま秋も混獲が少なければ想定と実際の結果に差はない。また、幼獣の年齢層の個体数が減っても、繁殖に寄与している成熟メスの数が大きく変わらず全体数が極端に減っていなければ個体群への影響は少ないと考えられる。

・例年、春の混獲は秋に比べ少ない。ただし、この秋にはこれまで混獲が多かった岬地区の定置網において格子網と捕獲網を設置する。そのことによって、例年であれば混獲されていた一定量が捕獲にまわる可能性も考えられる。（環境省）

<以後の議論は今後の対策に関わるため、議事 2. へ移行>

**議事 2. 今後の対策について**

○事務局より、資料 2 に基づいて、今後の対策（案）について説明。また、欠席された三谷委員の意見を紹介。

○主な意見等

**【被害防除対策について】**

・音波忌避装置は水中で音圧を計測し、効果のある範囲を調べた方がよい。また、「慣れ」の影響を調べるためには、生け簀実験は1週間以上、実施できると良い。欧州では音量について制限が設けられている。

**【調査研究等について】**

・水槽内での防除用格子網の実験については、サケが忌避する行動が想定されるの

で、漁業者に幅広く使用してもらうための説得材料としては不適切。

- ・アザラシの胃内容物を調べると、餌としてタコがとても重要であることがわかった。
- ・タコの延縄漁について、GPSを用いてどこでアザラシの被害が多いのか等を把握し、効果的な操業を検討していくことが重要。

→稚内での研究事例について、研究者に来て頂き勉強会を開催したいと考えている。(環境省)

#### 【捕獲頭数、幼獣の捕獲について】

- ・個体群管理上、幼獣は成獣の半分程度しか効果がないので、捕獲目標である140頭にこだわらず(捕獲頭数を成獣換算で何頭、と設定した上で)捕獲を続けるべき。
- ・対外的に『捕獲140頭+混獲73頭』と方針を公表しているので、それを超えないかたちでの捕獲がよいだろう。
- ・捕獲が幼獣に偏ると、将来的な個体群への悪影響が懸念される。
- ・短期的には幼獣に偏っていても、個体群の維持に問題はない。
- ・春の捕獲結果から、生息個体数を推定できないか。

→解析が必要。捕獲前と状況が異なり、また、1年だけの結果では難しい。

- ・刺し網の際にゴム弾を用いてみるなど、亜成獣以上をなるべく狙って捕獲できるよう努力すべき。
- ・(計画2年目である)現時点では『2015年時点の80%を目指す』という管理計画の目標を遂行するのがよいのではないか。(環境省)

#### 【今後の課題について】

- ・前提となる生息個体数が推定値であり、より正確な生息数を把握しなければならない。
- ・見える被害を軽減するという点では、とっさり食いをする傾向が成獣より強い幼獣を捕獲すれば被害が軽減されるかもしれないが、管理目標をどのように設定するのか検討が必要。

→作業部会でモニタリング手法を検討し、より正確な現在の生息頭数を把握していきたい。また、より正確な生息頭数やこれまでの捕獲データ等をもとに、次回の管理計画では管理目標の見直し(性別・齢別で個体群に与える影響の評価を変える等)を検討する必要があると考えている。(環境省)

#### ○上記意見等を踏まえ、科学委員会として以下の見解が示された。

- ・捕獲と混獲を合わせた頭数目標に基づき、個体群管理を行う。
- ・混獲分が不足した場合、捕獲で補う。
- ・捕獲と混獲頭数の合計は213頭を目安となるように留意する。

- ・亜成獣以上の捕獲を目指した手法を試行する。その上で捕獲された幼獣は個体群管理の対象とし、積極的に放獣することはしない。

### **議事3. その他**

#### **【スケジュール】**

- 次回科学委員会を来年2月、協議会を来年3月に開催する予定。また、その間に2、3回モニタリングに関する作業部会を開催する。